『死神』の傭兵記

著作権

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『死神』の傭兵記

【Ｎコード】

Ｎ６９９８Ｙ

【作者名】

著作権

【あらすじ】

最強の傭兵が悪の組織に雇われたら？そんな想像で出来た物語です。

ゲーム準拠ですのでポケスペの登場人物は・・・・・・・・・・たぶん出ません。名前は出ると思いますが・・・・・・・・

prolog（前書き）

詰まらないとは思いますが宜しくお願いいたします

prolog

朝日が顔を撫で、暖かな光が体を包む。彼は日が昇りはじめてから僅か数秒で起き出す。

傭兵の朝は早い・・・わけではない。しかし、気質故かどうにも早起きをしてしまうのだ。別に寝るのが早いと言うわけではないのだが、遅く寝てもこの時間に起きてしまうのである。

起き出してからまずは顔を洗う。これは当たり前のことであり、もししなかったら不潔扱いである・・・・・当たり前であるが。顔を洗った後、キッチンに向かい目覚まし替わりのコーヒーを入れるためにお湯を沸かす。ここには本格的なコーヒーメーカーなどない。ゆえにそこまで美味しくはないのだが、自分で入れたためか愛着・・・・ではないが気に入っている。

お湯を沸かしている間にもう見慣れた部屋を見渡す。部屋は１ＬＤＫ・・・一人ですんでいるため充分な広さがあり、また陽当たりもよくコーヒー同様気に入っている物の一つである。

奇妙な感慨に浸っているとお湯が沸いて、やかんがピーピーとなっていて今にもお湯が溢れだしそうだ。慌ててコンロの火を止め、やかんの中のお湯をコップに移し、インスタントコーヒーのもとを入れる。スプーンでかき回し、口に含む。苦味が口に広がる。インスタントコーヒーであるがやはりうまい。

コーヒーで目を覚まし、しばらく窓の外を眺めていると、突然ポケットに入っているライブキャスターが鳴り響く。ライブキャスターのスイッチを入れ、相手を見る。

「やあ、『死神(リーパー)』今朝はよく眠れたかな？」

そこにいたのは、自分を雇っている男がいた。その男は濃い藍色の髪、猛禽類のような鋭い目。男はニヒルに笑いかけてくる。

「なに、問題はない。よく眠れたよ、この前贈ってくれた低反発ベッドだったか？あれはいいな。寝心地がいい。」

「そうか、気に入ってもらえてこちらも嬉しいよ。」

男はそう言ってまた笑う。こちらも笑い返す。

「それで、部下を通してではなくライブキャスターなど使って来るとは何のようだ？」

「ククッ・・・・・・わかっているはずだが？」

男が今度は呆れたような笑いを向けてくる。自分のことをよく知っているくせにわざといってくる男に若干苛立ちながらも返事をする。

「それで？今回の仕事は何だ？お前が直々に仕事の話をするんだ・・・・・・・余程な仕事だろ？」

画面の向こうの男が一瞬凍りつく。

（ククッ・・・・・・今回はどんな仕事だ？せいぜい楽しませろよ？）

ー？？？ー

画面の向こうで笑っている男に戦慄していた。仮にも組織のトップである自分が怯えていては示しがつかないが、それも仕方がないだろう。見るものを凍りつかせる微笑。恐怖を持ったのはこれが初めてかもしれなかった。

「・・・・・ッ！・・・・・・まあいい。今回の仕事は・・・我々の目的に邪魔になりそうな『四天王』と『チャンピオン』であるシロナの近辺の調査と、『四天王』『チャンピオン』の実力の調査だ」

実際はどうでもいいのだが、もしものことがあっても困る。その予防策といったところか・・・・・・『四天王』と『チャンピオン』、連携をとられると厄介だからな。

「・・・・・！・・・・ほぉ、『四天王』と『チャンピオン』か・・・・・・丁度、退屈していたところだ。・・・・・・・・・・・・・・・・オイタしてもいいのだろう？」

・・・・・・・・・本気か？こいつ？まあ、できるだけ派手ではなければ・・・・といったことを伝えようとしたところ、何故か嫌

な予感しかしなかったので慌てて否定する。

「やめろ・・・・・・まだ計画が知られるわけにはいかない、できるだけ隠密に徹底しろ。」

少し上ずってしまった声に動揺しながら伝える。・・・・・こいつ相手だとどうしても調子が狂う。困ったものだ・・・・・・・・・・・・

上ずってしまっている声に動揺しながら伝えてくる男に微笑が浮かぶ。

「フム・・・・・・・残念だ、まあ仕方がないか。」

本当に残念だ、あの有名な女の『王（チャンピオン）』と戦えると思ったのだが・・

・・・・仕方がない、割りきるか。

「分かった、引きうえよう。で、詳しい日時は？」

「あ、あぁ、いつも道理メールで送っておく。・・・・・・・しくじるな『死神（リーパー）』・・・・・」

男が真剣な顔で言ってくる。誰にものを言っている？俺は・・・・・・

「俺は・・・・・『死神（リーパー）』・・・・・しくじるわけがなかろうが・・・・・・『アカギ』」

男ーーアカギはフッ、と笑い、そうだったなといって通信を一方的に切る。

『死神（リーパー）』・・・・・自分の二つ名、恐れられ、畏怖された。

「ま、俺は傭兵。せいぜい楽しませろよ？『四天王』『チャンピオン』・・・・・・」

prolog（後書き）

多分、週一更新になります。暇だったらもっと更新できると思いますが（ー__ー；）

1―1（前書き）

暇だったので投稿。

今日は勤労感謝の日。日頃お世話になっているひとに感謝。

ではどうぞ。

1―1

昼。

ギラギラと太陽の光がその身を焼かんと照りつけていた。まだ春先を越えたばかりだというのに夏が来た！とばかりに照りつける太陽。

若干額に汗を滲ませながら歩いて、かれこれ数十分はたとうとしていた。目的の場所である『シンジ湖』が一向に見えてこないことからまだ先だと検討をつける。

（だが、いくらか時間が掛かりすぎではないか？）

愚痴が出てくるのもしょうがないと言えよう。

あの後、アカギにメールを送ってもらい『四天王』と『チャンピオン』の情報を集めるため各地を飛び回っていたのだが・・・バトルができないことに加えて、情報も少なかったことに落胆しながら資料をアカギに提出していた。すると今度はシンオウ地方にある『三大湖』を調べてこい。と任務を受け渋々向かっていたのだ。

しばらく道沿いに進んでいるとシンジ湖に入る為の森が見えてきた。

（やっと着いたか・・・・・・これが『シンジ湖』・・・・・か・・・・・・・）

森を抜けると広大な湖が視界一杯に入ってきた。湖の淵に近づき、湖の中央にある大きな岩を注視する。

そうやって岩を眺めていると湖の入り口に誰かが来たのか、草むらが揺れる。入ってきた者が背後に立ったことを気配で感じ後ろを振り返る。そこにいたのは壮年の男だった。

「フムぅ、ここに来るのも何年ぶりか・・・・・暫く見ていなかったが此処は全く変わっていないな。」

男は鋭い目付きをしていて一見すると怖い御老人という風貌だったが、発している雰囲気から穏やかな人だと分かる。

「そうですか、私はちょっとした観光でしてね、初めて来たのですが・・・・いや、素晴らしい。・・・・・こんな神秘的な所もあるのですね・・」

「そうか・・・・この湖を古くから知っている者としてそのような言葉を聞けるのは嬉しいことだ・・・・。」

男はこちらを珍しがっていたので観光客と答えると納得したようだった。

「ぬぅ、自己紹介がまだであったな、私はナナカマド。皆からはナナカマド博士と呼ばれている。」

「失礼、私はナナシ《名無し》というものです。・・・・・しかし、かの有名なナナカマド博士とお会いできるとは・・・・・これもこの湖のお陰ですかね？」

そういうとナナカマドは僅かに笑って首を振っていた。

ナナカマドは忘れていたのか後ろに控えていた少年に声をかけた。

「コウキ！・・・ご挨拶なさい。」

少年はずっと会話する機会を伺っていたのか、嬉しそうにこちらに来た。

「こんにちは！俺、コウキって言います！ナナカマド博士の助手をやっています。」

挨拶もそこそこにナナカマドはもう帰らなければならないと言う。残念だがお別れですねと言うと頷いて帰っていった。カバン《・・・》を置いて・・・・・

忘れ物だと言おうとしたが誰かが来たようなのでその場から離れる。暫くするとまだ幼さが残る声の一組の男女がカバンの置いてあるところに向かった。

「おいヒカリ！こんな所にカバンがあるぜ！」

「さっきの人達の忘れ物かなぁ・・・・・・・・？」

そのとき一羽の鳥ポケモン、ムックルが人間が立て続けに来たことに驚いたのか男女に襲いかかって来た。

「うわッ！何だこいつ！ええぇ！なんかねぇのかよ、・・・・・・・・ッ！そうだカバン！」

少年はごそごそとカバンを漁っている。その間のもムックルが今にも襲いかかってきそうだった。少年達が襲われても大丈夫なように腰のモンスターボールに手を掛ける。

「あった！モンスターボールだ！ヒカリ！こいつを使え！」

少年は咄嗟に見つけたモンスターボールを少女に投げ渡す。少女は急いでポケモンを出した。少年も適当に選んだポケモンを出す。

出てきたのは・・・・・・・・・

「ポッチャマッ！」

「ナエトッル！」

少女はポッチャマ。少年はナエトルだった。少年達は出したばかりの彼らに必死になって指示を出していた。

「ポッチャマ！みずでっぽうよ！」

「ナエトル！たいあたり！」

技は見事に命中しムックルは気絶した。

「・・・・・・ふぅ、な、なんとかなったな？・・・・・・」

「う、うん・・・・・・そうだね・・・・・・」

そのとき、忘れ物に気づいたコウキが湖に入ってきた。

「き、きみたち・・・・・・そのポケモン使っちゃった？・・・・・・どうしよう・・・・・」

コウキはしばらく悩んだ後、

「と、とにかく、こっちに来てよ!・・・・・・」

コウキは少年達を連れて急ぎ足に湖を出ていった。

少年達が出ていった後、再び湖を眺めていると突然湖の水面が揺れた。

「なんだ?・・・・・・ッ!これは・・・・・・『エムリット』!」

水面を見つめていると中央の岩から幻のポケモンであるエムリットが透明な姿で出てきた。

エムリットはこちらをじっと注視して浮かんでいる。額に嫌な汗が伝う。

(・・・・・・なにかエムリットの機嫌を損ねることをしたか?・・・・・・ッ!不味いな・・・)

するとエムリットはこちらではなく湖の入り口に目を向ける。

しばらくの間エムリットは浮かんでいると突然消える。突然のことに驚愕し、周りを見渡す。

(消え・・・・・・た・・・・・・・・・・・・)

周りにはエムリットの姿はなかった。湖を出ながらライブキャスターを取り出す。

「なんだ?・・・・・『死神(リーパー)』?」

「エムリットが出た。」

「何ッ!・・・・・・・・・・・・」

アカギに掛け、エムリットに遭遇したことを報告するとアカギは驚愕の色を顔に浮かべている。

「本当だ。・・・・・・・どうするアカギ?何らかのアクショ・・・・・・・」

「いや、一旦戻れ・・・・・詳しい報告をそこで聞く。」

「・・・・・・・・・わかった・・・・・・・」

そこで通信が切れる。通信が切れたライブキャスターをしまうと溜め息をつく。足は朝方出た、組織の本部に向いている。

湖を出ると腰にあるモンスターボールに手を伸ばす。

「出てこい、クロバット。」

モンスターボールから出てきたクロバットの脚を掴みながら行き先を伝える。

「行き先は――――――――――――」

「トバリシティ：ギンガ団本部。」

1－1（後書き）

普通は毎週日曜日更新にしています。

1―2（前書き）

遅れてすみません。

1―2

視界一杯に広がる無機質な壁。壁から伝わる微かな冷気が肌に感じる。

冷気を心地よく感じながら建物の奥へ足を進める。歩いている間通り過ぎる人々に目を向ける。すると、視線を感じた人々はこちらに気付き自分の顔を見て畏怖のこもった目を向けてくる。恐れられていることに苦笑しながらさらに足を進める。しばらく歩くと目当ての部屋が見つかる。部屋の自動ドアが開くのを待って部屋に入る。

「アカギ、待たせたな。」

部屋に入りソファーに座っているアカギに詫びを入れる。

「おや？呼び出し喰らったと思いきや来たのは傭兵かい。」

言葉を発したのはアカギではなくテーブルを挟んだソファーに座っているジュピターだった。

「アカギ様をお待たせするなんて・・・・あなた、何様のつもり？」

次に言葉を発したのはアカギのそばに座っているマーズ。

「ふっ、マーズ。気に入らないからといって些細なことでカリカリしない方がいい。」

苛つき気味のマーズを宥めているサターン。

「サターン！こいつを庇うの！？アカギ様に雇われていると言うのに、アカギ様に敬意の一つも払わない傭兵の癖に！」

「はぁ・・・・・違うマーズ。君がイライラしているせいで話が一つも進んでいない。いちいち気にするものではないよ。」

「けど・・・・・・・！」

「やめやめ、会議も始まっておらんのに険悪な雰囲気でどうするつもりじゃ？・・・・・・・まったく・・・・・」

サターンとマーズの口論が激しさを増していくのにストップを掛けたのはプルート。
上からジュピター、マーズ、サターン、プルート。アカギをトップとするギンガ団の幹部たちである。

「いや、本当にすまないな。アカギ・・・・・」

「気にしなくていい。それで？例の件は・・・・・」

再びアカギに詫びを入れるとアカギは頷き話をする。即座に先程見た光景を頭の中に思い浮かべその時のことを話す。

「あぁ、俺が見たのはシンジ湖でエムリットが思念体のようなもので姿を表したものだ。」

「・・・・・・・そうか、やはり私の考えは間違っていなかった・・・・・」

「アカギ様・・・・・・・」

アカギは感慨深く溜め息をつくとソファアから立ち上がる。

「ご苦労だったな、『死神(リーパー)』・・・」

「いやなに、些細なことだ。」

アカギにつられて立ち上がる。そして詳しい内容を書いたデータ端末をアカギに渡す。

「プルート。これを使ってさらに研究を進めろ。少々計画を早めるかもしれんからな。」

「ヒヒヒ・・・・・仰せのままに。」

アカギは頷くと部屋を出ていく。それに続いてマーズが出ていく。プルートは端末を開き、なにか呟きながら出ていく。

「エムリットねぇ、ホントにいたんだねぇ」

「・・・・・ジュピター!・・・・・・・いや、そうだな・・・・・」

「おや?珍しい。サターンがアカギ様を疑うような発言に同意するなんて。」

「そう・・・・・・だな、少し考えることがあってね。」

サターン達も話しながら部屋を出ていく。部屋に一人になり、考える。

（エムリット・・・・・なぜ、出てきた?・・・・・まさか計画に関することでなにか感知したのか?・・・・いや、まさかな・・・・・）

考えても埒が明かないので考えを頭から追い出し、これからのことを考える。

「次は、自分で動いて見るか・・・・・・・・・・」

まずは――――――

――『王（チャンピオン）への接触』――

1―2（後書き）

感想、評価、意見よろしくお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6998y/

『死神』の傭兵記

2011年11月29日19時53分発行